

## フオーヘル博士の講ずる

### 東洋学研究に対するライデン大学の貢献 (下)

#### 大 類 純

極東に関する言語学や関連学に対してライデン大学が何を為したかを考慮するのが、今や残された問題である。<sup>(11)</sup>スカリジェとホリウスの二人の卓抜した学者については、ライデン大学における初期のアラビア語研究に関連して言及したが、この二人は中国語にも興味をもっていた。彼らの関心は、年代論についてのいわゆる「チャタヤン」方式に眼を向けるに及んだ。スカリジェは、チャタヤンの十二支流、即ち十二進法の周期に精通するようになった最初の人であった。彼はその知識を、アンテオケ（シリアの都）の大司教で、後にローマにのべられたイグナティウスとの文通に負うている。

ホリウスは、学識ぶかいジュスイット（カソリック・イエズス会信徒）のマルティノ・マルティニ神父から、動詞についてのさらに高度の知識を得た。彼は神父がアムステルダムからアントワープへ旅行している時、ライデンで遭ったのであった。この会談で、ホリウスはチャタイとチャイナ（中国）とが同一語であるということを確立しえた

のであった。彼は、十二の周期を漢字で出版した。これがオランダで中国の文字が木版から印刷された最初で、さらにこの種の文字（象形文字）がヨーロッパで印刷されたのはまさしく最初であるといふことが出来るであろう。マルティニはホリウスに数冊の漢文の書籍と写本類を贈り、ホリウスはそれを彼が既に所有していた蔵書の中に加えたのである。しかし、これらの漢文の文書はライデンに残り伝わることなく、重要な部分は結局ポドライアンにまでわたっていった。

東方との貿易は、オランダに極東の二大帝国と直接に接触する機会を齎した。日本との商業的、文化的関係は特に興味あるものである。オランダの最初の船が非常に大きな損害を受けながら航海の後、日本に辿り着いたという時代の始まりは、一六〇〇年まで遡る。ヤクス・マフの指揮の下に、インドへ向う途中にマジェラン海峡を通過した五隻の船の一つは、ロッテルダムのエラスムスであった。その船は一〇八人の乗組員のうち、僅か十六人が残っていただけであった。<sup>(12)</sup>二、三年

後に在外商館が建ち、最初の館長はヤクス・スペクスであった。

長期間にわたって（一六三八〜一八五四）日本が鎖国をしていたことは周知のことであるが、オランダ人だけが貿易を許されていた唯一の国であった。しかし、彼らの出入りは長崎港の近くの出島という小さな島にある在外商館に厳格に制限されていた。一年に一度、館長は徳川将軍に表敬のために、現在の首都東京である江戸に参上せねばならなかった。この使節団は、オランダ人にとって日本の国民について非常に多くのことを学ぶことを可能にしたし、この見聞はモンタヌスとヴァレンティンの著作に具体的に表現されている。<sup>(13)</sup>

ライデン大学での中国語と日本語の正規の研究・学習は、一八五一年になってはじめて始められたが、その淵源は間接的には日本との初期の関係の成果にあったのである。それは二人のドイツの抜きん出た学者の努力に負うところがあった——Ph・F・フォン・シーボルト（一七九六〜一八六六）とJ・J・ホフマン（一八〇五〜七八）である。前者は、バヴァリアのヴェルツブルク出身の著名な医師であり植物学者であり、その幅広い科学への関心、不屈の精力、高邁な理想には瞠目すべきものがあった。オランダ東インド軍の軍医少佐に任命されて、彼は出島に派遣された。日本に六年滞在した間に（一八二三〜二九）、彼は自ら医学の実際活動を大いに広げ歩き渡らせたので、長崎の郊外の民家に居住することを許された。ここで彼は私塾のようなものを開き、また植物学、動物学、鉱物学、地質学に関する収集に着手した。

一八二六年に、彼は館長に同伴して江戸に向いた。二年後のことだが、彼は軽はずみにも日本地図を手に入れたことが見つかり、それは外国人に見せることも厳重に禁ぜられていたものであった。その結果、多くの彼の日本人の友人や弟子たちが投獄された。国事犯の罪を負わされて、彼自身は永久追放で罰せられ、一八二九年末までには日本を離れなければならなかった。

幸いも、彼は収集資料をライデンに送るのに万全の策を講じたので、それらがライデン大学の民族誌学博物館の核（中心）となった。この種の学術施設としては最初のものである。一八三〇年、フォン・シーボルトはライデンの町はずれの田舎家に定住した。彼はその住居を「ニッポン」と呼び、庭は日本の植物の栽培用にした。菊、シャクヤク、百合が美しく咲き匂うこのユニークな庭園は、ヨーロッパの各地から訪れる多くの見物客を引きつける魅力をたたえた光景であった。大学図書館に保存されている来客署名簿には、多数の宮廷名士や学者、芸術家の名前が見える。一八三九年四月に記載している最初の訪問者は、クザレヴィッチ・アレクサンダー（後のアレクサンダー二世）と彼の伯父であるオレンジ公である。<sup>(14)</sup>翌一八四〇年に父の後を継いだオレンジ公はフォン・シーボルト博士の抱く日本をヨーロッパ文化の影響に開放する主導的な役割をオランダが担うということを企図する、遙かなる遠大な政治的方策に強い関心と興味をもったのである。しかしながら、この計画は最も気注大な動機によって奮い立たされたのであるが、オランダの指導的政治家たちの乗気になるところとはならな

った。日本の開放は一八五四年に成就し、同じ年にフォン・シーボルトの追放の判決は撤回された。このことが、彼をして彼の生涯を捧げたる国——日本を再び訪れることを可能ならしめたのである。しかし、かなり痛烈な失望に終ったこの第二の日本滞在（一八六〇〜六三）については、われわれは詳しく語ることができない。フォン・シトボルトは、一八六六年十月十八日にムニヒで死去した。

先に述べたもう一人のドイツ人学者のヨハン・ヨゼフ・ホフマンもまたヴェルツブルクで生まれ、この同じ環境が彼がフォン・シーボルトと近づきをもつようになったのである。この二人は、偶然一八三〇年七月にアントワープの旅館で出会うことになったのであるが、その時フォン・シーボルトは丁度日本から追放されてオランダに還つてきたところであった。並みはずれた芸術的才能をもったホフマンは、優れたデザイナーでもあり、声楽家でもあり、芸術家としての生涯を期待されていた。だが、稀にみる洞察力を備えたフォン・シーボルトは、彼がその著『ニッポン』<sup>(16)</sup>を執筆するに当って、この同郷人をその助手としての仕事に従事させた。この著書は、日本についての彼の広い知識を具体的に表現し、多方面にわたって記述した広汎な労作である。ホフマンの主たる仕事は日本の文献を翻訳することであったので、彼は先ずその言語を学ばねばならなかった。かといって、日本語を正規に学ぶのは彼がヨーロッパで最初であったので、先ず中国語に精通することから始めなければならなかった。このことにおいて、彼はフォン・シーボルトがバタヴィアから雇われた中国人である高敬蔵（推定

音写）を教師として得ることができた。のみならず、アベル・レムザの『Grammaire chinoise 中国語文法』を手引書として手に入れた。こうして彼は、両国語を習得するのに成功したのである。

一八四六年にホフマンは、政府事業機関に年俸一八〇〇フランで日本語翻訳官に任命され、同じ年に彼の著作『Buddha-Pantheon 仏陀の殿堂』が世に出た。これは、著者が作製した四十枚の石版印刷の挿画の入った、日本仏教についての標準的な著作である。その五年後に彼は中国語・日本語の教授に任ぜられた。このようにして、この二つの重要な言語がライデン大学の教科に組み入れられるようになった。ホフマンの主要な職務は、政府機関に中国語および日本語の通訳を養成することであった。その上、中国語の知識は、オランダ領東インドに住む多数の中国居住民のためにも、きわめて重要なことであった。ホフマンは、広い範囲の問題について夥しい数の論説を書いた。ライデンで一八六七年に、オランダ語および英語で出版された日本語文法は、彼の傑出した功績である。その独訳版が一八七七年にライデン（ブリル出版社）で出された。彼の弟子の一人の証言するところによると、ホフマンは「最も地味で控え目で、勿体ぶらない学者の一人であり、あらゆる虚飾や誇示の敵であり、自己の業績については決して自慢することなく、そして彼の弟子たちに助力するためにいつでも自分自身の仕事を別に取りのけておく体制のできている人」であった。彼は、一八七八年一月十九日にライデンで歿した。

ホフマンの後任は、一八七七年に門人の一人ギュスターフ・シュレ

ーゲル博士が継承していたが、彼は十年間バタヴィアで中国語通訳をしていた。彼は、中国の古代地理学、民族学、碑銘研究についての多くの論文を発表した。彼の後継者はJ・J・M・ドゥ・グルーで、以前に民族学の教授をしていたが、一九〇四年にシュレーゲルの教授職の任務を引受けた。一九一二年に彼はベルリン大学の椅子に応じることになった。シュレーゲルとドゥ・グルーの二人が独占的に中国語を教えていたので、ドゥ・グルーが赴任していってしまうと、その椅子を埋める中国学者を見つけ出すのが難しいことが判り、空席のまま放置されていた。

五年の空席の後、M・W・ドゥ・ヴィッセが日本語教授に任ぜられ、一九一九年には続いてJ・J・L・ドゥイヴェンダク博士が中国語の講師に任命された。一九三〇年にはこの講師職の地位は、教授職の地位に改変された。同年、中国学研究所がドゥイヴェンダク博士のもとに創設された。蔵書の充実した図書館をもつこの研究所は、若い中国学者を育成するのにその有用性を十分に証して余りあるものがあつた。そしてその若手研究者は、今や少なからぬ人員がライデン大学のスタッフとして入って来ている。

M・W・ドゥ・ヴィッセ博士は、ドゥ・グルーの弟子であつた。五年間(一九〇四〇九)彼は、東京のオランダ大使館に通訳として所属していた。帰国して彼は、ライデン民族学博物館の中国・日本部管理者となつた。この職務の中で、彼は日本の貴重な色彩版画の蒐集品を整理し、目録を作製した。同じ時期に彼は、日本仏教と仏教イコノ

グラフィイ(図像学)の研究に打込んだ。彼が書いた数篇の重要な専門論文は、この研究の領域での彼の能力を証明するに足るものである。彼は一九一七年に日本語講座の椅子を引受け、一九三〇年に逝去した。彼の後任者はJ・ラーデル博士で、彼は一九四六年からエール大学の日本語教授であつた。

マレー語がインドネシアの西欧系言語として大きな重要性をもっていることを考え合はすときに、一八七七年にいたるまでこれが學術研究の主題として認められていなかったという事は、確かに驚きに値することである。一七世紀に、ライデンではその言語に相当な関心もたれていたといふことは事実である。現在ライデンやケンブリッジに保存されている初期マレー語の写本類は、元来アムステルダムの人々の斡旋で手に入れたライデンの東洋学者が作ったものである。エルペニウスが、アラビア語、トルコ語、マレー語に起原を尋ねられるモハメッド教教義信条について一書を著わすつもりでいたが、一六二四年に早逝したために、この彼の計画を達成できなかったといふことをわれわれは知っている。一六六五年に、ヘルベルト・ドゥ・ヤゲルがバタヴィアから東インド会社支配人にあてて手紙を出しているが、その中に、もしも自分に数冊の本と幾ばくかの金を用立てて貰えるならば、二年で自分のもつてゐるマレー語の知識を他の東洋諸語と肩を並べて専門の学校で教えられるほどに仕上げてみせるのだがと述べている。また、次のようにもつけ加えている。「マレー語を完全に完成した形で齎す最初の人となる光栄を手中にすることは、決して少しばかり

りの刺激ではないであろう」。しかし、彼の本国の主人たちは、彼の啓蒙的熱意を共有しようとする気がなかったようである。

東インド会社の役人(社員)は、話し言葉の実際的知識で自己満足していた。もっと厳密なマレー語の学習は、東インド諸島(マレー群島)で宣教に従事しているプロテスタント教会の牧師たちによってなされていた。その中の一人に、G・H・ウェルンドリーというスイス人がいたが、『Maleise Boekzaal, 1736』という教科書を編纂し、これはそれが書かれた当時にとっては決定的な評価を得た著作であった。マレー語訳の聖書が一七世紀のはじめから始まっていた。その最もよく知られているのは『ライデックカー-Leidcker』(一七〇〇年頃)で、現在でもなおアンボイナのクリスチアン人口の間では高い評判を享受している。

ジャヴァの主要言語であるジャヴァ語の研究は、一九世紀以前には始まらなかった。ジャヴァ語の文法が出版されたのは一八三三年で、辞書は一八四七年であった。新約聖書のジャヴァ語訳は、一八二三年セラポールで刊行された。これがこの言葉で印刷されたは最初の本である。マレー語とジャヴァ語は共に、オランダ領東インドの文官官吏を志望する学生にとっては、重要な学科目であった。はじめは、デルフトとライデンの両方にこの文官を養成する特別研修所が在った。一八六四年に、その教育はライデンに集中され、一八七六年にはライデン大学に委任された。新しい機能にうまく対処するために、一八七六年の大学法によってライデン大学にマレー語とジャヴァ語の教授のポスト

を、また西部ジャヴァの言語であるスンダ語の専任講師のポストを用意した。次第に、東インドの行政官や裁判官の養成を託されている教授の数も一二名に増加した。新しい配列には非常な便宜が払われていた。学生たちは、最高の権威者からの教育によって、行政職か司法職となるのに有用なことを学ぶことができるようになっていた。イスラム教を理解するためには、スヌック・ウルグロンジュに手ほどきを受け、インドネシアの慣習法(Adatrecht)については、C・ファン・フォレンホーフェンから授業を受けた。しかしながら、ライデンにおけるインド学の研究が比類ないほど高く評価されたものは、このような著名な碩学によって伝えられ、与えられた知識によるもののみではない。さらにそれよりもいっそう多く感激させられるのは、かれらの教授内容を性格づけている自由の精神である。自由の精神は、とりもなおさずオランダがインドネシアに解放を齎したといわれる偉大な仕事であり、またその国を統治するに当って自由の精神は、即ち先頭に立つべきその国の先住土着民の幸福である、というのがかれらの信念であった。この問題は、本稿の考察の主題からは逸脱しているので、改めて別個に近代における欧米先進国のアジア侵略植民史の問題として論じたいと思う。ただ、インドネシアを旅した数人の専門家が、オランダのインドネシア統治機構について、それぞれの感想や判断を述べているので、それを挙げておくに留める。<sup>(20)</sup>

インドの文官が、その抜群にして顕著な存在期間を通じて、少なからざるきわめて有能な学者を輩出し、その人びとが考古学、古代史、

古銭学、言語学やその他幾つかの研究部門において卓越した業績を果したことはよく知られている。以下、二、三の学者の名前のみを挙げておく。J・クネーベル、J・ブランデス博士傘下の考古学委員会所属のメンバー。G・A・ヴィルケン（一八四七～九二）はインドネシア社会学と慣習法についての偉大なる権威者で、その多方面にわたる著作は、一九一二年に全四巻で公刊された。F・A・リーフリック（一八五三～一九二七）はバリ島とロンボク島の民族学と慣習法を研究した。ヤコブ・マリントロットはボルネオの民族学と慣習法で、この論題についての学位論文（ライデン、一九二八年）は、大きな価値を提供した秀作である。以下省略。

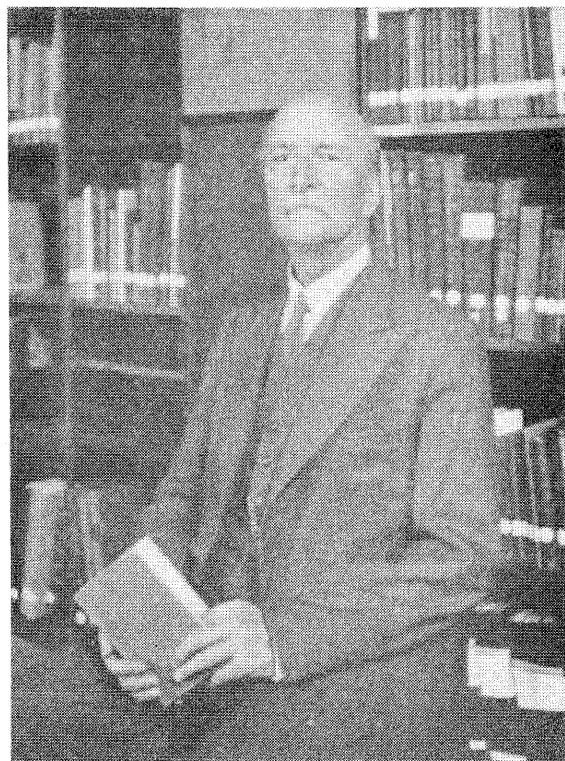
P・V・ファン・スタイン・カーレンフェルズ（一八八三～一九三八）は、ジャヴァの文官になるべくライデンで教育を受けたが、役人という職業のもつ拘束が彼の好みに合致しないことが程なく判った。もっと活動的で冒険的な職業を望んでいたからである。東部ジャヴァの火山クルト山の斜面でコーヒーの売買仲介業に従事しているうちに、原住民の言語や伝説に深く興味をもつにいたった。彼は古代寺院に描かれた図解的なリリーフ（浮き彫り）とともにワヤン（wayang）を研究し、伝説の伝承的な学問についての彼の該博な知識をその解釈・説明に適用せしめた。この分野における彼の才能に対し、クロム博士は彼に勤めて Archaeological Survey（考古学調査）に対して彼の有益な助力を提供して役だてるようにさせた。三十八歳の年に、カーレンフェルズはヒンドゥー・ジャヴァ語とインド考古学の三年コースに就学

するために、ライデン大学に改めて入学し、その終りの三年目に学位を取得した。東インド諸島に帰ってからは、彼は主として先史時代の研究に没頭した。彼は、こういったインドネシア研究の優れた先駆者であっただけではなく、またインドシナ、マレー、フィリッピン、中国、日本の同じ研究方面でも他の研究者とともに実り多い共同研究を成し遂げた。彼の探検旅行の基地であったコロンボで病を得て入院したが、その死に先だつて彼はその巨大な体軀に髭を貯え、威風堂々たる声を出す偉容の持主であったがゆえに、彼自身伝説上の人となった。そして、ジャヴァやスマトラの村人たちは、彼をスーパー・マン誕生の实在として尊敬した。

ところで、再びインドネシア言語の研究に還ってみるならば、この研究舞台で活動する人材の中で、H・N・ファン・デル・トゥーク（一八二四～九四）がきわめて突出した顕著な位置を占めている。ケルンは、いみじくも彼のことをインドネシア言語の最大の泰斗であり、それらの比較研究の開祖であると喝破した。この二人の天才は、その気質、性格、経歴で非常に異っているが、両者ともヘブライ語の教授ラトガース博士にサンスクリット（梵語）を教わった。若い頃、ファン・デル・トゥークはバタック（Batak）<sup>(21)</sup>の写体を勉強するため、ロンドンに行った。その写本類は現在インド政庁図書館に保管されている。彼は二つの目録を作製した。一つは、東インド会社（一八四九年）所蔵のマレー語写本で、もう一つは、王立アジア協会（一八六六年）所有の写本である。一八五〇年に彼は、バタックの言語を研究



PHILIPP FRANZ  
VON SIEBOLD



J. PH. VOGEL

するためにオランダ聖書協会によって、スマトラの内政についての職  
件を委嘱された。その当時は、その地方はまだ治安が不安定で、充分  
調査されていなかったため、その仕事は困難なばかりではなく、危険  
をも伴っていた。彼が著わしたバタック語の辞典、文法、教科書は、  
彼の異常なまでの言語学的洞察力を立証して余りあるものがある。政  
府施設に入ってから、彼が初めてバリ島の言語研究に着手したが、  
ここではヒンドゥー教の珍奇な形態が現代にいたるまで保持されてき  
ている。ファン・デル・トックは現地民と親密な接触を保ちながら、  
ここに二十年間住みつき、かれら現地民の生活様式を彼はその研究に  
採用していった。彼は、一途にカウ・イ・バリ語辞典の編纂に専念した  
が、彼の死にいたるまで遂に完成を見ることができなかった。彼は、  
年齢七十歳でスラバヤの陸軍病院で死没した。彼の蔵書と写本類は、  
彼がライデン大学付属図書館に遺贈した。ファン・デル・トックは、  
その人となりは怒りっぽく、非社交的で無愛想で、宗教ぎらいで、且  
つ権威ぶる人に反抗的な気性をもっていた。論争をこととする彼の論  
文では、彼は相手に対して、洗練されたというほど遠い態度でよ  
く攻撃をしかけた。しかも同時に彼は、思いやりのある心を持ち、温  
和で優しく、寛大な性質であったし、これらの優れた特性がバリ島の  
住民の間に彼の人望と人気を高からしめたのである。

一八七六年の大学法によって、新しい二つの博士号が制定された  
——インドネシア文学とヘブライ、アラビア等セム語系文学に対する  
ものである。それと同時に、言語担当官 (taalambtenaren) の養成に

対する規定が作られ、その機能・職務は、ジョージ・グリアスン<sup>(23)</sup>  
という光輝ある名で親しく想い起される「インド言語調査」のそれと比  
較されて然るべきものである。インドネシアは、インドのように、信  
じがたいほど夥しい数の言語が話されている国である。<sup>(24)</sup> それ以来、イ  
ンドネシアの言語調査が、ライデンで教育を受けた政府担当官によっ  
て組織的に遂行された。インドネシア文字の修学に対して要求・規定  
された教科課程は、アラビア語、サンクリットを三年間講読し、引  
続いてマレー語、ジャヴァ語およびエーゲ海の諸言語を学習すること  
を含むものであった。後には、さらに民族学と比較言語学が追加され  
た。毎年、或る一定の数の前途有望な学生が選抜され、政府からの俸  
給が支給された。また同時に、聖書協会は伝道布教の仕事のためにラ  
イデンで青年の教育を準備することによって、この有益な事業の喜び  
をとにもすることを持續してきた。

後者のクラスの言語学者の中で、N・アドリアニ博士は特別に名前  
を挙げるに値する。彼の活動範囲はセレベス島であったが、そこで彼  
と彼の妻はトラジャス族の中に入りこんで生活し、驚くべき作風でそ  
の原始部族の言語と特性に精通してしまった。他にインドネシア文学  
に聳えたつ学者たちといえば、J・C・G・ホンカーであり、彼は小  
スンダ列島の言語を現地で研究した後に、ライデンでジャヴァ語の教  
授となった。またG・A・J・ハジュは、ジャヴァで抜群の経歴を  
経た後、一九二一年にホンカーの後任となった。ジャヴァの影絵芝居  
としてよく知られているワヤンについて書いた彼の博士論文(一八九



七年)のほかに、彼はジャヴァの文学、言語学、民族学について多量の論文を書き、またさらに植民地政策の問題に關しても書いてゐる。健康を害して彼は一九二八年に教授の職を辞し、翌一九二九年の末に急逝した。

今世紀の始めから、バタヴィアにあるオランダ政府か、或は聖書協會に勤務する言語学者の数は、絶えず増加してきている。それらの中には、インドネシアの各地方で民族誌学研究に鋭意献身した者もいた。ほかにはまた、「民間講座」(Volksleeruur)に従事する者たちもいたが、これは一九〇九年に始められた政府事業の一環で、マレー語、ジャヴァ語、スンダ語の小説、短篇小説、旅行記を出版して、インドネシアの民衆の中に興味と関心をかきたてようというものであった。この中には、オランダ語やフランス語からの翻譯も含まれていた。他の者たちはまた、ジャヴァ人や他のインドネシア人の青年に特にかれらの民族文化について教育するために、ソローに建てられた学校の教師に任命された。W・F・ストゥッターハイム博士がこの教育施設の初代の校長で、この制度が成功したのは彼の熱意と学識に負うところが大きい。彼はまた、ライデン大学の卒業で、大学は一九二四年に彼にアーリヤ文学の博士号を授けている。彼の学位論文はドイツ語で執筆され、インドネシアにおけるラーマ伝説とラーマのリリーフを取り扱っている。

アーリヤ文学は一九二一年に設けられ、言語学・文献学研究の一構成組織で、学生たちにサンスクリットとそれに関連のある学科の研究

に専念することのできる力を与えることを目的としており、アヴェスタ語とインドおよびインド・ジャヴァ考古学をも包含している。それゆえこれは、オランダ領インドの考古学調査に参加したいと願う人びとに、適切なカリキュラムを提供したものである。ストゥッターハイムが、このように創設された機会の恩恵を得た初めての人であった。しかし、オランダ人、インド人の数人の才能のある学究の徒が、彼の範例に従った。その中の四人は現在なお、インドネシアで考古学および教育の仕事に従事している。

これらの学問的労力と苦心の着実な進歩発展も、一九四一年十二月の日本との戦争勃発によって突然に、しかも急激に停止された。ジャヴァ海(ジャヴァ沖)の凄惨な死闘(一九四二年二月二十七日)の後、インドネシア全土はまもなく抵抗不能の状態に圧倒されてしまった。その時点で、およそ三〇人ほどの考古学者、民族学者、言語学者が、教育や探検や伝道の仕事に従事させられた。或る者は軍隊に入隊せねばならなかった。そのほとんど全部のものが、捕虜収容所に投獄されるか、或いはビルマや日本でむりやり苦力として強制労働させられた。一九四五年八月、解放を迎えてからも、かれらは悲惨な状態にあった。かれらが自分たちの仕事を取り返して再び始めることができるようになったのは、オランダに帰還して長く生活してからはじめて漸く可能になるという状態であった。七人が戦争で、獄中で、或いは釈放後まもなく死んだ。

その死をわれわれが深く嘆き悲しんだ人びとの中にストゥッターハ

イム博士がいるが、彼は一九三六年に考古学指導官としてポツンシュ博士の後任に就いたのだった。彼は、一九四二年九月にバタヴィアの病院で他界した。もう二人のきわめて有能な言語学者についても述べておきたい。一人は、中央セレベス島でアドリアニ博士の仕事を引き継いだS・J・エッセル博士で、もう一人は、高名なライデン大学教授(H・ケルン博士。前稿(上)参照)の孫のW・ケルン博士である。この令孫ケルン博士は、長崎で船の波止場での苦役を三冬も切り抜けて、ボルネオで彼の研究活動を再開したのだが、その時突然一九四六年六月にバンジャーマンで客死したのだった。

インドネシアにおける研究事業の将来は何であろうか。一七七八年に創立された王立バタヴィア芸術科学協会はどうなるのであろうか、また一世紀半以上にわたっている科学的研究の記録に何を回顧することができるのであろうか。戦争の動乱を驚異的に逃れてきたその協会の博物館や図書館の今後はどうなるのであろうか。このことは、一に政治的情勢の進展にかかっているであろう。

広い意味において、インドネシアで続けられてきた研究事業は、主としてオランダ人の熟達した専門家の業績であった。このことは、民族的・国家的罪悪を抜きにしていえることであると思う。オランダ以外の外国の多くの学者によってなされた傑出した貢献についても、すべて完全に知られている。それぞれ異なった分野での偉大な先駆者であった三人の著名なイギリスの学者の名前だけを挙げておくにとどめる。一人はウィリアム・マースデン(一七五四―一八三六)で、スマ

トラの民族と言語についての著書を著わした。次に、スタンフォード・ラッフルズ卿(一七八一―一八二六)で、イギリスの王位空白期間のジャヴァの総督代理で、彼の著『History of Java ジャヴァ史』(二八一七年)はその島とその古代風習・制度に抱いた彼の絶大な興味を示している。『History of the Indian Archipelago インド諸島史』(一八二〇年)の著者ジョン・クロウファード(一七八三―一八六八)は、彼の同僚である。第三番目に、詩人であり言語学者のジョン・ライデン(一七七五―一八一)で、その編著『Malay Annals マレー年報』は一八二二年に刊行された。

自国の考古学、民族誌学、言語学の探究・踏査に参画してきたインドネシア人の数が意外なほど少ないということは認めざるをえない。しかし、今やインドネシア共和国が成立したことであるし、研究事業を続行するに足る十分な数の有能有為のインドネシア人の人材が、きわめて近い将来に出来上がるということを期待することは恐らく許されるであろう。

東南アジアにおける政治情勢の発展は、疑いもなく西欧における東洋研究に影響を及ぼすであろうし、また現在、その結果が有利なものであるか、或いはその反対であるかを予言することは不可能である。ライデン大学が、過去においても保持してきた東洋研究における顕著にして卓越した地位を持続することができるようにということが、衷心より願望されてならない。

〔追記〕

一九五一年十二月のJ・H・クラマーズ博士の長逝は、オランダにおける東洋学研究にとって痛烈な損失であった。彼はライデンで法律を勉強している間に、スノウク・フルヒロンジュのアラビア語講座に列して学習した。一九一五年に博士号をとってから、コンスタンチノープルのオランダ大使館に所屬し、その首都に七年間滞留していた間にトルコ語に完全に精通するようになり、そのトルコ語が彼にとって興味つぎない研究対象として存続したのである。一九二二年に、彼はライデン大学のトルコ語およびペルシア語講師に任命され、一九四〇年にはヴェンシンクの後継者としてアラビア語教授に就任した。彼は特に、彼が改訂したイブン・アッカールの著述の新版の中に現われるような、古代アラビアの地理学者の研究に没頭した。しかもまた彼はイスラム教史にも甚大な興味をもち、コーランについての深い学殖をもっていた。彼の編集・校訂に負うところが大きくして『Encyclopaedia of Islam イスラム教百科辞典』が刊行された。彼の休むことを知らぬ不屈の労力は、彼の健康をいたくそこなってしまう、生涯の終りの三年間は活動を制限しなければならなかった。彼は、多方面にわたる博識の学者としてというだけではなく、また偉大なる紳士としても語り継がれることであらう。

〔註〕

(1) 当時のライデン大学の俸給の平均は、教授で八〇〇フランであった。

- (2) 第二巻の英訳は、キナントによって一九三〇年頃と聞かれる。
- (3) 近年、新版が次のような表題で出版された。Encyclopédie de l'Islam Nouvelle Edition éditée par J. H. Kramers, H. A. R. Gibb et E. Lévi-Provencal, livraison 1, Leiden, E. J. Brill, 1933.
- (4) Geschiedenis van den Godsdienst tot aan de heerschappij der wereld-godsdiensten.
- (5) Journal van Dirco van Adrichem's Hofreis naar den Groot-Mogol Aurangzeb, 1652, uitgegeven door A. J. Bernet Kempers (Werken Linschoten Vereeniging, Vol. XLV), 's-Gravenhage, 1941.
- (6) J. Ph. Vogel: De eerste "grammatica" van het Hindoestansch (Mededeelingen der Kon. Ned. Akademie van Wetenschappen, N. R., Vol. IV, No. 15), Amsterdam, 1941.
- (7) この綴図は Philosophical Transactions of the Royal Society, No. 210, May, 1694. の中に公表された。オランダの画家ヘットマン・ブントによって一六五一年に調制された一枚の非常に優れたイリスホルムの絵が、フアン・ファン・ブントによって出版された(Oud en Nieuw Oost-Indien, Vol. V, Part I, p. 221)。しかしながら、誤ってイリスホルム・ファン・ヤケルの作と歸せられてゐる。
- (8) "Het zijn vele jaeren geleden, dat enen Herbert de Jager een boerenzoon uyt het veen of daer omtrent, die sijns gelijcken in die orientalse taelen niet heeft gehadt, ja die genoghssem alle taelen Kundig was, aan mij heeft gesonden sijne atfekeningen van dit Persepolis." (Letter of Nicolaas Wisen to Gisbert Cuper, dated 1st January, 1713.)
- (9) ケルンが『シャータカマラー』のテキストを校訂出版した(一八九

- 世) の事承て、*ニヤン・ニヤン* の翻譯を出版した。The *Gāṭaka-māṭa* or Garland of Birth-Stories by Ārya Śūra, Translated from the Sanskrit by J. S. Speyer, Sacred Books of the Buddhists, Edited by F. Max Müller, Vol. 1, London (Oxf. Univ. Pr.), 1895.
- 他に *ニヤン・ニヤン* の偉大な業績は、サンスクリット文章法の研究に金宇脊を打ち出したことである。J. S. Speyer: *Sanskrit Syntax*, with an Introduction by Dr. H. Kern, Leyden—E. J. Brill, 1896.
- (10) *Pañcaviṅśa-Brahmaṇa*, 1931; *Das Śrautasūtra des Āpastamba*, 1921~28.
- (11) この問題を取扱うたおかげで、J. J. L. ヴォイウ・ヘンダック、C. C. クリーゲル、G. W. J. ドゥリヒュースの諸教授おかげで、A. A. ケルン講師によって与えられた助力に負うところが多大である。また、本稿におけるブラヒミヤ語研究の記述に関しては、故 J. H. クレイマーヌ教授に多くの恩恵を受けていることを記しておきたい。
- (12) *ハラスタス* というその船の最初の名前は、*ヂ・リーンヂ* (De *Liefde* 慈愛) という名に変えられた。これは、*ヂ・フーン* (De *Hoope* 希望)、*ト・ゲル・ウ・* (t. *Geloove* 誠実) などというこの小船団の他の四隻の船の名前に調和させるためであった。しかし、その船は今でも船尾にこの偉大なヒューマンニストの木像を残している。高き *メーテル* はこの船の像は、日本人に没収され、寺の中に置かれた。そして寺では「サチキ」という名のもとに礼拝された。これは多分ポルトガル語の *カチニスタ* (Catechista 伝道師・使節) から由来しているものと推測される。これは現在、日本の国立博物館に保存されている。
- (13) *Arnoldus Montanus: Gedenkwerdige Gesantschappen der Oost-Indische Maatschappij in't Vereen. Nederland aan de Kaisaren van*
- Japan, Amsterdam, 1869; *François Valentijn: Oud en Nieuw Oost-Indiën*, Vol. V, book 9, pp. 1~166.
- (14) *Vide J. I. L. Duyvendak: Early Chinese Studies in Holland. T'oung Pao*, Vol. XXXII, 1936; do.: *Holland's Contribution to Chinese Studies*. 後者は、一九五〇年三月二十日ロンドン・キーンズ・ホーン・学会 (Anglo-Netherlands Society 英和協会) の中国学会 (China Society) の会報 *奈羅* の特集号である。Britain and Holland. Official Journal of the Anglo-Netherlands Society.
- (15) *トベト* の大書 *創設者* *キーンズ* の *公鑑*。
- (16) *Nippou, Archiv zur Beschreibung von Japan*, Leiden, 1832~52. Reprinted in 1930.
- (17) *キーンズ* の *主要著作* は、*The religious system of China, its ancient forms, evolution, history, and present aspect, manners, customs, and social institutions connected therewith*. Leiden, E. J. Brill, 1892~97 and 1901~10.
- (18) この書 *奈羅* の *出版* は、*Sinica Leidensia* の *第* *一* *巻* の *第* *一* *号* に *載* せられた。
- (19) *説教* の *前* に *立* つ *専* 業の *牧* 師 (聖職者) を *指* す。
- (20) *Clive Day: The Policy and Administration of the Dutch in Java*, New York, 1904. *J. Chatley-Bert: Java et ses habitants*, Paris, 1914. *J. S. Furnivall: Netherlands India. A Study of Plural Economy*, Cambridge, 1939; do.: *Colonial Policy and Practice*, Cambridge, 1948. *Charles Robegnan: Le Monde malais*, Paris, 1946. cf. *Rahindranath Tagore: "Letters from Java"*, *Visva-Bharati Quarterly*, Vol. V, p. 327; p. 7, 169 ff.; VI, p. 375.

- (21) ジャカルタの旧オランダ名であるバタヴィアの言語。
- (22) Kawi は、サンスクリットの Kavya (古典梵文学の美文体欽定詩) からの派生語で、最初は古代ジャヴァ語を指すことばとして用いられた。
- (23) G. A. Grierson: *Linguistic Survey of India*, II vols., Calcutta, 1903~28. (Sien Konow 教授がムンダー語系とドラヴィダ語系の部分に協力執筆)。第一巻・第一部 (Introductory, 1927, 518 pp.) は、大きなインド言語全体に対する総括提要で、グリアスン博士のライフワークとしての大研究事業の結晶である。
- (24) 「インド言語調査」は、一八八六年ウィーンで開催された国際東洋学者会議の決議によってグリアスン博士を調査総監とし、ノールウェーの碩学ステン・クヌーヴら多数の学者・報告協力者を編成し、インド政府の支援のもとに二十五年の歳月をかけて行なわれた。しかし、この調査においてさえも全インドには及ぶことができず、マドラス州、ハイデラバード、マイソールの重要な地方が除外されている。ただこの調査の結果、この時点で出されたインドで使用中の言語は、標準形一七九、方言五四四の合計七二三の多数を数えている。

## [N・B]

本稿は、フォーヘル博士 (J. Ph. Vogel, C.I.E., Ph. D. ライデン大学名誉教授、サンスクリット・インド考古学担当) が、第二次世界大戦終了後まもない一九四九年六月二十三日、王立インド・パキスタン協会の求めに応じて講演した内容に主として拠っている。東洋学全般を対象としているため、アラビア、ヘブライ、ペルシア、インド、中国、日本、インドネシア等のアジア広域にわたっている。

ためと、ヨーロッパにおいてアジア研究の伝統と実績において著名なライデン大学の研究史に広く言及しようとしたため、焦点がいささか散逸したきらいは避けがたい。

筆者が従来この種の (特にインド学研究の) 各国における研究状況を探究した論文には左記の如きものを発表しているので、参照しただければ一助を果たすことと思う。とくに、一九六五年九月発表の論考は、本稿 (上・下) に接続する意味をもっている。

「東ドイツにおける最近のインド学研究情況」(「印度学仏教学研究」第二六号、一九六五年五月)。

「オランダにおけるインド学研究の今昔」(「鈴木学術財団・研究年報」第一号、一九六五年九月)。

「ラガヴァン教授の報する「インドにおけるインド学研究」」(「印度学仏教学研究」第三四号、一九六九年五月)。

「ヴラッド・バナテアーヌ委員長の伝えるルーマニアにおけるインド研究の概況史」(「東方学」第六一号、印刷中)。

(本学教授・倫理学)